

中国との交流

講演会「中国古代考古学の諸問題」の開催

日中共同研究会の第3回講演会が1993年12月11日、平城宮跡資料館で開かれた。演者・題目は次の通りである。謝端琚「馬家窯文化の彩陶」、殷璋璋「長江流域の古代銅鋳」、烏恩「匈奴文化の発見と研究を総括する」。謝氏は、馬家窯文化諸様式の彩陶を概述するとともに、そこにみられる原始芸術や観念形態にも触れた。殷氏は、湖北省銅緑山の発掘資料を中心として、戦国期以前の銅山開発と冶金技術について述べた。烏氏は、中国における匈奴研究の現状を紹介するとともに、寧夏・内蒙古出土の未発表の金属製品を多数報告した。3人の演者は、いずれも中国社会科学院考古研究所の研究員であり、スライドを交えた講演は、現在の中国考古学の高い研究水準を示すものであった。比較的多岐にわたる問題であったにもかかわらず、来聴者も多数であり、日本における中国考古学への関心の高さを感じさせた。また、講演後、日中の研究者間の研究交流の場がもたれ、様々な問題が活発に話し合われた。

(加藤真二)

貴州省建築考察訪日団の来所と講演

西南中国民族建築研究会および日本建築学会農村計画委員会の招きにより、1993年10月20日から27日まで、貴州省建築考察訪日団が来日した。訪日団のメンバーは、羅徳啓（貴州省建築設計院長・団長）、譚鴻賓（貴州省土木建築学会副委員長）、金珏（貴州省工学院民族建築研究所長）、陳肖龍（貴州省科学技術協会国際部）の4氏である。奈良・大阪・神戸・姫路・東京などで歴史建築および現代建築を見学したほか、奈良では10月21日に古都調査保存協力会主催の交流会が本研究所で開催され、団長の羅徳啓氏が「貴州少数民族の居住文化とその研究観」と題する講演をおこなった。また、東京では10月26日に日本建築学会農村計画委員会主催の「貴州少数民族の住居と集落に関するシンポジウム」が建築会館で開催された。このシンポジウムでは、羅徳啓氏および浅川（奈文研）の研究発表に対して、大河直躬（千葉大学）・太田邦夫（東洋大学）の両氏がコメントを加えたのち、聴衆をまじえた総合討論をおこなった。シンポジウムの記録は、『農村計画情報』17号（1994年5月）に掲載されている。

(浅川滋男)

国家文物局・中国文物研究所との交流

古都調査保存協力会の招聘により、郭旃（国家文物局文物一处長）、黄克忠（中国文物研究所副所長）、姜懷英（中国文物研究所石窟部主任）の3氏が来日された。招聘期間は、1993年3月1日から10日までである。この間、奈良と京都の解体修理現場を中心に古建築を視察していただくとともに、3月4日には本研究所において、日本側研究者との意見交換会を催した。この会は、まず郭氏の「歴史的記念物の保護と管理」と題する文化財行政関係の講演からスタートした。中国においては、経費の面もさることながら、伝統的技術に携わる人材の確保・育成が、文化財保護にとって大きな問題になっているとの指摘がとくに印象深かった。続いて黄・姜両氏が、それぞれ「石窟の保存と修理」「ポタラ宮の修理方法」と題し、中国における文化財建造物修理の実例をスライドをまじえて紹介された。以上の発表に対して、日本側の鈴木嘉吉・細見啓三（以上奈文研）・岡田英男（奈良大学）・濱島正士（国立歴史民俗博物館）・田中淡（京都大学）などの諸氏から質問や意見がだされ、活発に議論がかわされた。歴史的建造物の復原と修理に関する中国との交流は、91年の羅哲文氏に始まり、去年の楊鴻勳・張之平両氏の招聘をへて、すでに3年めを迎えたが、両国の木造建築構造の相違や修理観の違い、あるいは文化財をめぐる物的・社会的環境の差異や共通点について、ようやくお互いの理解が深まりつつあるといえよう。

(浅川滋男)